

てからは、柔術じゆうじゆつの練習にも、あまり熱がはいらなくなっていました。

ある日、井上道場に一人の青年がたずねてきました。それは、前に、この道場の弟子であった嘉納治五郎かのうじごろうでした。嘉納は、道場でけいこをしている四郎をみて、四郎のすぐれた素質そしつを見ぬき、自分のところに来ないかとさそいました。少年の夢が破れて、がっかりと悲しんでいた四郎に、新しい道をきりひらいてくれたのは、この嘉納治五郎でした。

東京帝国大学ていこく（今の東京大学）を卒業して、学習院がくしやういんの先生をしていた嘉納治五郎は、新しい時代を生きていく若者を育てていこうと考えていました。

鎖国きこくをやめて外国とつきあうようになった日本に、ヨーロッパなどから、新しい文化や考え方などが、つきつきと入ってきていました。東京では、着物をやめて洋服を着る人、ぞうりやげたをぬいで靴くつをはく人などが出てきました。馬車や人力車がが町を走るようになり、あちこちの町の間をむすぶ鉄道もつくら